



チェルノブイリに思いをよせて

# ポレーシエ

本 紙 週 報 新 刊 月 刊 1999年(平成11年)10月1日(金曜日)

## 放射能 見えぬ恐怖



**子らの被ばく心配 避難所の夜、息ひそめ**

「チェルノブイリ原発事故から10年が経ち、事故の惨状が改めて浮き彫りにされている。事故発生から10年経った今、チェルノブイリ原発事故の被害者や関係者の苦しみは、決して癒えることがない。事故発生から10年経った今、チェルノブイリ原発事故の被害者や関係者の苦しみは、決して癒えることがない。」

## 東海村で放射能漏れ 国内初の臨界事故発生!!

‘99スタディ・ツアー (9/5～9/14) で見てきたチェルノブイリ原発の町「プリピャチ」が、日本の東海村に出現したかのような。

緊急避難、30万人の外出禁止、交通麻痺、まさに…

「日本版チェルノブイリ」である。

事故が起こるたびにいつも繰り返される、「思いもかけなかった事故」「人為ミス」という言い訳。この国の原子力政策は、こんな基本的な安全性も守れなかったのか？ 見えない放射能の恐怖、「この先何が起きるのか？」という住民の不安、重大な被曝で生死をさまよう作業員…。私達がチェルノブイリから伝えたかった事が、今、目の前で繰り返されている。

**チェルノブイリ事故10周年 避難所が巨陸**

「チェルノブイリ原発事故から10年が経ち、事故の惨状が改めて浮き彫りにされている。事故発生から10年経った今、チェルノブイリ原発事故の被害者や関係者の苦しみは、決して癒えることがない。」

<避難先で放射能を測る子ども。(日経新聞 10月1日朝刊より)>

これは、日本の原子力推進に対する重大な警告である。

日本国内には、50基を超える原発がある。もしも、日本でチェルノブイリのような事故が起こったならば、私達には、逃げ出す場所も移住すべき場所もない。(次ページに続く)

〒466-0822 名古屋市昭和区楽園町137 1-10  
 チェルノブイリ救援・中部 代表：田中良明  
 郵便振替：00880-7-108610  
 TEL/FAX：052-836-1073 (月・水・金 10:30~15:30)

## 東海村臨界事故は、日本版ミニ・チェルノブイリ

9月30日に東海村の核燃料転換工場JCOで起きた事故は、世界的な原子力撤退の流れに逆行してきた日本の原子力行政への大きな警鐘である。高速増殖炉「常陽」の燃料製造過程で事故がおきたこともその象徴といえよう。

「核燃料の臨界事故」は原子力開発において最も危険で重大な事故で、早くからその危険性は解明されてきた。1950年代以降核兵器開発の過程で、アメリカやイギリス、ロシアなどでいくつもの臨界事故が起き、その経験によって防止対策は完成している。この種の事故は世界で過去20年間ほとんどなかったのである。臨界事故の防止は原子力の「基本の基本」、最も初歩的な安全管理であり、その国の原子力技術のレベルを示す。これが、原子力先進国を自認する日本で起きたことの意味を関係者は真摯に受けとめなければならない。

第2に、こうした事故が起きた際の対応が全く出来ていないことに驚く。事故発生当初から臨界事故と推定されたにも関わらず、15時間以上たっても事故を沈静化する方策がたたず、会社も政府もただ手をこまねいていた。その間に何回もの臨界爆発が起き、その度に放射能が環境中にばらまかれたのである。チェルノブイリの消防士は家族と国家のために燃えさかる原発に突入した。日本では事故に際し、誰がどう対処するのか。勿論、危険を冒さなければならないが、傍観するだけでは事故が拡大するばかりである。これが、大規模な原発事故だったらほとんどなすすべがない。それでいいのだろうか。今回の事故は原子力災害における無責任体制を明らかにした。

第3に、作業員3名の被曝線量は深刻である。1名が17Sv(シーベルト)、1名が10Sv他の1名が3Sv(半数致死線量が4Sv)とのことである。まさにチェルノブイリ事故処理作業員の被曝線量である。環境中の放射能は工場敷地境界で毎時700~800マイクロ・シーベルトに達した(通常0.07程度)。9月に救援・中部が行ったチェルノブイリ・スタディー・ツアーで測定したチェルノブイリの石棺近く(150m位)でさえ、30~40マイクロ・シーベルトであった。今回の線量はその20倍を超える恐るべき線量である。10Km圏内の住民の屋内待避、半径350m以内の住民避難、小中高校の屋内待避、交通規制etc.何から何までミニチュア版チェルノブイリである。

本格的な原発事故が起こる前に日本は原子力から撤退すべきである。

チェルノブイリ救援・中部

## お知らせ

特定非営利活動法人 チェルノブイリ救援・中部 設立総会を下記のとおり開催します。

### 記

日時 10月23日 午後1時より3時まで  
場所 愛知県中小企業センター

前号で法人化にともなう正会員の募集をしましたが、締切の8月25日までに79名の申し込みがありました。ほぼ予想どおりの数と評価しています。とりあえずこれで法人チェルノブイリ救援・中部は発足しますが、本会の支援者で今回正会員になられなかった方は、これから先いつでも正会員になることが出来ます。

定款の作成などの法人化のための準備もほぼ整い、上記のとおり10月23日に設立総会を開催することになりました。正会員には設立総会の議案書をすでに送りました。

設立総会に提案される設立趣旨はつぎのとおりです。

1986年4月26日に起きたチェルノブイリ原子力発電所事故からすでに13年が経過しているが、事故の深刻さ、放射線障害の特殊性、被災国の経済的、社会的混乱による救護体勢の不備などにより、被災者の境遇は一段と悪化している。このような状況のもと、この事故の被災者を救援し、国際協力と人権の擁護に寄与するため、任意団体チェルノブイリ救援・中部の事業を継承して、本会を設立する。

法人になると会の運営は理事が行うことになります。これまでの活動の実体を変えないため、現在の運営委員がそのまま理事になることにし、以下の11名を理事候補として提案しています（敬称略）。

伊藤玲子、大谷早苗、河田昌東、神野英樹、高井信行、田中良明、戸村京子、中島しぐれ、橋本京子、原富男、山盛三千枝

設立総会の後に愛知県に認証申請し、4ヶ月後に認証される予定ですから、法人として正式に発足するのは来年3月になります。来春はちょうど本会の設立10周年に当たりますので、法人化と重なって第二の出発の年ということになります。今後ともいっそうの協力、支援をお願いいたします。

正会員の皆様 設立総会にはかならず出席して下さい

## スタディ・ツアー報告会

9月のウクライナ連続講座は、第2回「チェルノブイリ救援スタディ・ツアー」の報告会として、一般参加者とスタディ・ツアー参加者が一緒になって行われました。

9月4日、スタディ・ツアー参加者は、「ウクライナの現地の様子は?」「子ども達の健康状態は?」「原発4号炉の石棺は?」「救援物資の行き先は?」等さまざまな興味関心を胸に抱き、ウクライナへと旅立ちました。



〈9月25日/名古屋・YWCAにて〉

今回は、年齢層も幅広く(19才から62才まで)、男女ほぼ半々、合計17名もの参加者が集まりました。

ウクライナ到着後は、現地のNGO「移住基金委員会」や「ジト--ミル消防局」等の歓迎を受け、日本にきた事もある「移住基金委員会」代表のキリチャンスキーさん、ドンチェバさん、消防局のアントニュークさん等、親しい人々と再会する事ができました。

9月8日は移住者の村「ゼレムリャ村」、汚染地である「ナロジチ地区」、「チェルノブイリ原発」の3コースに別れて見学。今回は11名が原発コースを選びました。



〈挨拶をする田中代表〉

原発から30キロの立入禁止区域「ゾーン」に入ると、さっそく持参した放射能測定器で検問所の周りを測定。さらに事故処理で汚染された車両やヘリコプターなどが(整然と並べられたまま)捨てられている10キロ圏を通りぬけた時は、皆、驚きと深いため息。

原発敷地内に入ると、4号炉の石棺から吹いてくる風と、鳴り続ける検知器の音に放射能を感じて、皆の顔が緊張。早く立ち去りたいという思いと、そこで今も働く人々の身の安全を思い、心が重くなりました。



〈4号炉(石棺)の前で〉





〈立ち入り禁止区域に住む人々〉

移住者の村「ゼレムリヤ村」では、医薬品の支援を続けている「ゼレムリヤ診療所」、村で唯一の小さな日用雑貨店、小学校や地区集会所等を訪れました。

ここでは馬車が現役で働いていたり、のどかな田園風景が広がっています。

慣れない土地での厳しい生活ではありますが、そこには放射能の汚染から逃れた、確かな安心感がありました。



〈移住者の村（ゼレムリヤ）〉

9月9日には、「シトール州立小児病院」「市立小児病院」「州立孤児院」を訪問しました。そこでは、日本から送った保育器や粉ミルクなどが大切に使われていました。



〈事故処理作業者協会のチュマクさん達〉

翌10日は、「チェルノブイリ障害者協会」「事故処理作業者協会」「ブルシロフ病院」等との話し合いを行いました。

被災者の健康状態や生活実態等、今後の救援活動に欠かせない大切な情報を得る事ができました。

今回の参加者は、それぞれにとっても充実した「スタディ・ツアー」の日々を過ごし、心に深く刻み込まれたたくさんの想いと、温かい心のぬくもりを胸に、9月14日全員笑顔で帰国しました。

次ページ以降に、参加者の皆さんの感想文を紹介します。 (京)

# ウクライナと出逢って

市原佳代

13年前の4月27日、デートの支度の合間にテレビをつけると、画面にはチェルノブイリの惨状が映し出された。それを見てどれくらい心が揺れたかは記憶にない。その後も続いている悲劇にも目を向けたことはない。このツアーに参加するまでは…。

☆ ツアー中のたくさんの出来事の中で、特に印象的だったこと。

**その1** キエフで乗った遊覧船で知り合った母子。私たちが日本人と分かると（勿論支援団体とは知らない）、家族が難病に冒されているので医薬品を調達してくれないかと訴えてきた。ウクライナで病気が蔓延し、且つ治療が困難なことを象徴している話だった。

**その2** ウクライナで一番ウクライナらしくない所、州立孤児院。そこは米国に移住したウクライナ人（女性）が多額の寄付をしていることから、他には類を見ない豪華さ。しかし、そこでもミルクが足りないという事実。

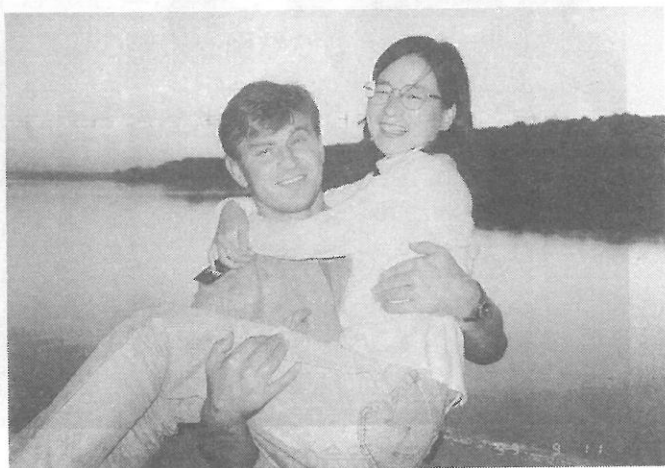
**その3** シトーミルで、消防局で経理をされていた38歳の女性の葬送に居合わせた。若い世代の死が身近にあることを痛感した。

**その4** 脳卒中で一時危篤になったが、今は「救援・中部」の贈った車椅子に乗り、リハビリを続けている消防士ポピクさん。「必ずまた元気になる」という力強い言葉に感動!!

**その5** お別れパーティーでのアントニュークさんの「いつか50人くらいで日本を訪問して、困難を克服したと伝えたい」という言葉。彼ら事故処理作業者は「祖国のため」とおっしゃるが、私たちを救い、地球を救ったという事実を、感謝の気持ちと共に伝えたい。と同時に、その犠牲の大きさに深く心が痛む。

最後に、彼らの心の支えとなっている救援・中部の活動の貴さが身に染みた。そしてその活動における継続性が何よりも評価されているのだと感じた。メンバーに対しての彼らの信頼は絶大なもので、うらやましいほどだった。

ほとんど予備知識のないミーハーな市民代表として参加したが、ウクライナに関してはミーハーを返上しようと思っている今日この頃…。



# ドアの外はウクライナ

伊藤美保

さて、ウクライナから帰国して2週間になります。1人のアパートに戻ったのですが、ドアを開けると、外はウクライナのような幻想にとらわれています。それは、すぐそこにある現実として考えられるようになったからです。

私が印象深かったことを、いくつか書きたいと思います。(簡単で申し訳ありません)

チェルノブイリ原発を見学に行った時、強制疎開地区であるのに、再び戻って住みついている人々の村も訪問しました。ちょうど畑仕事を終えた老女が家路につく途中でした。写真撮影を頼むと、慌てて泥まみれの頬をタオルで拭き、私の隣に並びました。彼女の笑顔は生き生きとしていました。そして、「私達は、先が短いから、どこに行っても同じです。」と言いました。運命に腰をどっしりと据えている人は、こんなに素晴らしく笑えるのだろうか複雑な心境でした。

それにしても、ホテル`エレクトロン`で出会った子ども達は心身共に病んでいるのか、活気が無く、顔色ひとつ変えない仮面のような表情の印象を受けました。彼らなりに、自分の将来を考えているのだろうと思うと、いたたまれなくなります。

また、被曝を受けた障害者の方達は、つらい胸の内を話して下さり、私達に礼を言って頭を下げられたときは、何もしていない自分を恥ずかしく思いました。これからは自分の幸せ探しばかりしていないで、みんなの幸せが私の幸せであると言える大人になりたいです。

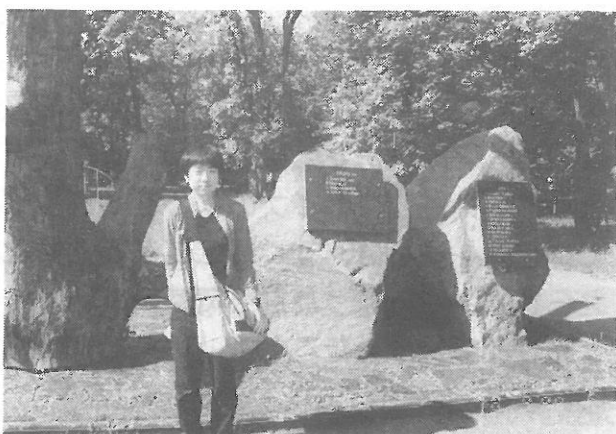




## 知る者、知らぬ者

山口順子

大学生である私はNGOに興味を持っている。そこでNGO活動に詳しい某教員の研究室へ行き、そこでNGOがスタディツアーというイベントを催すことを知った。まずは彼らの活動を見てみなさい、とアドバイスを受けた。ある一室でツアーを探していた。ヨーロッパ地域にも



も関心がある私はできるならばヨーロッパへ行きたかった。多くの団体の活動地はアジアであり、私のわがままを満たすツアーがない。活動を見るのだから場所は二の次にしようとしたらこのツアーを発見した。今回の参加者は事故そのものがきっかけで参加された人が多いだろう。しかし私はNGO活動を見ることが最初のきっかけである。

出発前に事故についての本を読んだが実感が湧いてこなかった。複数の重病を抱えて汚染地で生活するという異常な世界が想像できなかった。具体的



な病名や統計的な数字より、もっと根本的なそのことへの答えを見つけたかった。ナロジチコースを選択した理由である。移住対象地域であるナロジチでは皆が日常生活を送っている様に見える。彼らは24時間×日数×年数ずっとこの状況にいる。この地区は高齢化の傾向があるという。なぜか日本の過疎地が頭に浮かんだ。第一ゾーンまで移動したが私は車内で待機指示された。周辺の空気も何かが違っていた。異常な世界を実感したがそこで生活するということが今も分からない。測定器でしか判断できない空間放射能は匂いも色もない。危険だと知っていても、生きるための唯一の方法ならば選んでしまうのか？

「ポレーシェ」の読者はこの問題を十二分に知る人達である。しかしチェルノブイリは続いている事を知らない者もいる。伝道者になって特に親しい人に伝えて欲しい。

…最もお勧めするのは現地へ行き、実感することだと思いますがね。



## 「チェルノブイリ」に重なる「東海村」

山盛三千枝

「チェルノブイリ・スタディ・ツアー」…チェルノブイリ原発事故のその後を尋ねる旅から、今私達は時空間を溯り、「チェルノブイリ」そのものへと戻ったような体験をしている。私達はいつでも「チェルノブイリ」の被災者になりうることを、9月30日の「東海村の臨界事故」でいやという程思い知らされた。

信じがたい放射能を浴び急性放射線障害で倒れた人々、49人の「ヒバク者」(もっといえるだろう)、160人の「避難民」、31万人の「屋内待避」を余儀なくされた人々、学校・病院・郵便局等の公共施設や銀行の機能停止、農業・商業・漁業などへの影響、交通のストップ等、重大な犠牲と混乱を引き起こした。

この事故の推移は、まるで「チェルノブイリ」を復習させられているかのようだ。しかも、その事故に対する対応は、「チェルノブイリ」から何も学んでいないことを露呈してしまっただけのお粗末なものである。「事故は起きない」を前提としている国だから。起こりうる事故を「想定外事故」と他人事のように言い捨てる。事故は、十数時間手つかずのまま推移し深刻化した。今回の事故への判断と対応を行った政府・原子力安全委員会の罪は重い。「取り返しのつかないことをしてきた」という猛省が求められている。

今回、「チェルノブイリ・スタディ・ツアー」に参加し、改めてその事故の深い深い爪跡というものを感じた。無念さと激しい悔しさが胸をふさいだ。

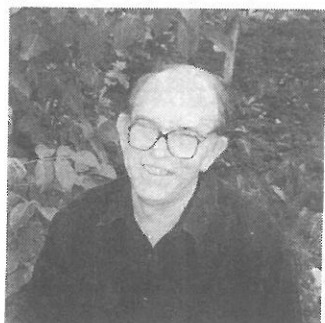
美しいウクライナは、新たなヒバク者を生み出している。汚染された森林火災の消火活動に従事する若い消防士達のことだ。私達の訪問の1ヶ月前に大森林火災があり、ジトーミル州の各消防署から若い消防士達が消火活動へと赴いた。3日間、ほとんど眠らずの作業だったという。鎮火後消防士達は、'86から'87年当時の事故処理作業員と同様、身体の不調を訴えている。

日本で、今回の事故よりもシビアな事故が起こらないことを、「チェルノブイリの地」にもうこれ以上ヒバク者が増えないことを、心の底から祈る。今だからこそ、「チェルノブイリ」から学ばなければならない。

☆ スタディ・ツアー特集(参加者の感想文)は、引き続き次号にも掲載します。



＜汚染地域の森林火災現場…自然発火や不法侵入者等の火の不始末により、大規模な森林火災は今も後を絶たない＞



「若い友人の皆さんへ」（静岡県星美学園御中）より抜粋

今皆さんは、学校の50周年記念日に向けて忙しく準備をしていることでしょう。

さて、私たちの「移住基金」についてお話ししましょう。1989年8月に私たちがこの基金を創立したとき、ジトーミル州の、放射性物質によって汚染された町や村から人々を移住させることが緊急の課題になっていました。国には十分な資金がありませんでした。チェルノブイリ原発の壊れた4号炉の「石棺」の建設や、土地・建物の除染に、大変多くの費用がかかったからです。私たちは自分たちの力で人々を移住させようと決意しました。

8軒の家を買い、そこに9世帯を移住させました。2軒は日本のカレンダーを売って得たお金で買いました。このカレンダーは「チェルノブイリ救援・中部」他に送っていただいたものです。

ソ連が崩壊したとき、経済事情は悪化しました。お金の価値は下落し始め、家の値段は急速に上がりました。そこで私たちは、チェルノブイリの被災者に医薬品の援助をすることにしました。病院や個人のために薬を購入したのです。私たちの活動の方向は変わりましたが、基金の名前は変わりませんでした。

私たちは、皆さんがミルク・キャンペーンに参加していることを知っていて、とてもありがたく思っています。皆さんが買ってくれる車椅子も、それを本当に必要としている障害者に渡されます。新聞、ラジオ、テレビを通じて、私たちは「救援・中部」や皆さんの学校からの援助についての情報をいつも流しています。皆さんのお手紙やクリスマス・カードは、私たちにとってとても大事なものです。私たちはそれらを学校や幼稚園に配ります。ウクライナの子もたちも皆さんにお便りを書いています。どうぞウクライナの子もたちからの手紙に心を留めてやって下さいね。

先日、ある若いお父さんに援助をしました。彼の息子は4ヶ月で、奥さんは結核のため入院しています。私たちは赤ちゃんのために粉ミルクを買いました。今度は冬物の暖かい服を買ってあげたいと思っています。人の不幸を目の当たりにするのはつらいものです。そして人びとに援助をすることが、私たちの人生の意義となったのです。皆さんもそんな気持ちを大事にしてくれればうれしいと思います。

わが国での生活はとても苦しく大変なものです。人びとは貧しく暮らしています。給料が遅配となっているのです。貧しい食事やビタミン不足のため、多くの子どもたちが病気にかかっています。すぐそばに病気の子も、おなかをすかせた子どもがいるという意識はとても気持ちを滅入らせます。そして援助ができるときには気持ちが楽になるのです。最近ある女の子のために補聴器を買いました。今日その子が、おばあさんと一緒にお礼を言いに来ました。私たちは彼女が聞こえるようになったことを喜び合いました。耳だけでなく、心でも聞くことができるのはうれしいものです。

## チェルノブイリ奨学生決定、9月から給与開始

### 奨学生リスト

No	姓名・父称	大学	専攻	出身地
1	ザベウチク・オリハ・ ヴィタリブナ (女性)	国立ジトーミル 教育大学	外国語学部	オブルチ区
2	シベツキー・エフゲニー・ ヴィクトロヴィッチ (男性)	同上	物理数学部	オレフスク区
3	コスチュシュコ・オクサナ・ ビクトリブナ (女性)	同上	自然学部	コーラステン区
4	コヴァリンスカ・ナタリア・ レオニヂブナ (女性)	同上	言語学部	オレフスク区
5	テレジュク・レーシャ・ ペトリブナ (女性)	同上	初級教員養成 学部	ナロジチ区
6	コヴァリシナ・ナタリア・ ワシリブナ (女性)	ジトーミル州立 基礎医学専門学校	助産婦部	オブルチ区
7	ウランベツイ・エーラ・ グリゴリブナ (女性)	同上	医学部	オレフスク区
8	コルズン・ナタリア・ ミコライブナ (女性)	同上	口腔病学	コーラステン市
9	トカチュク・テチャナ・ ミコライブナ (女性)	同上	看護学部	ルジンスキー区

昨年末から準備し、チェルノブイリ事故 13 周年に当たる今年 4 月 26 日に発足した「チェルノブイリ奨学金」制度が、ウクライナの大学の新学期が始まる 9 月からいよいよスタートした。上のリストの奨学生は全員放射能汚染地区出身または両親のいずれかが事故処理作業員手帳を持つ、チェルノブイリ被災者の子どもたちである。この学生たちは卒業まで毎月 10～20 ドルの奨学金を受け取り、返還義務はない。特に医学専門学校生は全員両親を亡くした子どもたちで、彼女らが困難な環境に挫けず無事卒業し、看護婦や準医師として活躍する日が来ることを心から願っている。今後毎年数名～10 名ずつ新たに奨学生を採用し、10 年間は継続する。ささやかながら、いったん始まったこの制度を簡単に止めるわけにはいかない。私たちの肩の荷はずっしり重い。はじめの寄付金 1000 万円を基金に、今後も皆様からの寄付を積み上げて 10 年間は継続する予定である。チェルノブイリの子どもたちの心に希望の灯をともしために奨学金をお寄せ下さい。

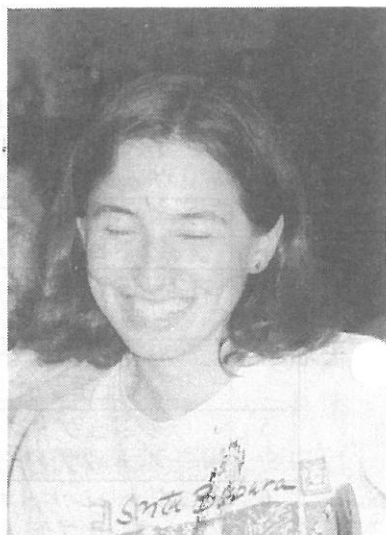
(河田)

## さようならイーラ!! また会う日まで…

名古屋大学に留学していたウクライナ・キエフ言語大学日本語学科の学生イーラ・ペトリチェンコさんが、この程一年の留学期間を終え、帰国されました。

彼女はキエフ駐在の救援・中部のメンバー、竹内高明さんの教え子という関係から、来日当初より救援・中部とのつきあいがありました。

「ウクライナを知ろう連続講座」では度たびゲスト参加をお願いし、資料の提供や講師として協力していただきました。講座の参加者には彼女と一緒に作ったウクライナ料理やウクライナの人々の暮らしについての話など、忘れられない思い出となっていることと思います。彼女は旺盛な好奇心、チャレンジ精神、行動力などで日本語力もレベルアップさせ、さわやかな笑顔と、とても好ましい印象を残して名古屋を去っていかれました。キエフに戻った彼女に、きっといつかウクライナで再会できる時があることと思います。



さようなら私達の愛するイーラ、

『ド・ポヴァーチェンニャ（また会う時まで）!!』

### 事務局便り

9月第2～3週、スタディ・ツアー一行がウクライナに行っている間、事務局で一人で留守番という事で多少緊張。しかし、ノープロブレム! とても順調な日々でした。

このところの円高の恩恵を、スタディ・ツアーに参加した皆様も、多少は受けられたのではないかと思います。昨年9月にウクライナに救援金を送った時は、1ドル=138円前後だったのですが、今年の9月には、106円前後で送金できましたので、去年よりたくさんのお援助ができた事になります。円高で困る方もいらっしゃるのですが、手放しで喜んではいられません。限られた援助金でより多くの支援ができることは、海外の救援をしているNGOにとってはありがたい事です。

(松田)

お詫び 「ポレーシェ」52号「長良 養護学校で今年もカンパ」の記事中、「岐阜県立長良病院」は「国立長良病院」の誤りでしたので訂正させていただきます。

### 編集後記

- ・ポレーシェ愛読者の皆様はじめまして。今号より編集に携わることになりました。2日間て仕上げるという編集作業、パソコンに向かう姿は皆、真剣そのもの。(かよ)
- ・スタディ・ツアーを終え、まずはホッ。日常の時間の中で頭と胸の内を整理し、さあ、スタ・ツア写真パネルを抱えて、「チェルノブイリ・語りベツアア」へ出かけよう。(京)
- ・スタディ・ツアーには、毎回「行ってみたい」と思っているのに、いつも学校の休みからずれている。とっても残念だ。いつかは参加して現地を見てみたい。(あ)
- ・なぜ 1000 マイクロシーベルトを1ミリシーベルトと言い換えるのか? なぜ8シーベルトが半数致死量(4シーベルト)の倍だと言わないのか? 「ポレーシェ」はハッキリ言おう。「これは、明らかに日本のチェルノブイリだ。」(J)